1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0475300687
法人名	(株)ウェルフェアーフォレスト
事業所名	グループホームすだちの里
所在地 （電話番号）	仙台市若林区沖野7－6－30 （電　話）022－781－2382

評価機関名	特定非営利活動法人介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会
所在地	仙台市宮城野区榴岡4－2－8　テルウェル仙台ビル2階
訪問調査日	平成　19年　11月　27日

【情報提供票より】（　19年　11月　9日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	平成　19年　7月　1日	
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計　18　人
職員数	17人	常勤　13 人，非常勤　3 人，常勤換算　13 人

（2）建物概要

建物形態	○併設／単独	○新築／改築
建物構造	鉄筋コンクリート　平屋造り	
	1 階建ての　階 ～　1 階部分	

（3）利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃（平均月額）	60,000　円		その他の経費（月額）	実費　円
敷　金	有（　円）		○無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	○有（ 60，000円） 無		有りの場合 償却の有無	○有（2ヶ月）／無
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり　750円			

（4）利用者の概要（　11月　9日現在）

利用者人数		17 名	男性　5 名	女性	12 名
要介護1		3　名	要介護2	11	名
要介護3		1　名	要介護4	1	名
要介護5		0　名	要支援2	1	名
年齢	平均	83.25 歳	最低　64 歳	最高	92 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	鈎取歯科、閑上クリニック

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

建物は平成16年に建てられ、前事業者から入居者ごと現事業者に19年7月に引き継がれた。外観、屋内共に明るく清潔感にあふれている。玄関先のプランターには入居者の手による季節の花々が、前庭の畑には野菜が誇らしげに揺れているのが印象的だ。管理者はじめ職員の介護ケアに寄せる想いは『認知症の高齢者が尊厳を持って自分らしく日々暮らせること』に尽きるようだ。「ケアはこれで良しというところがない」という職員の向上心がシビアな「自己評価」にも表れている。笑顔で表情豊かな生活をつくっていくために社会との関わりを積極的に持ちたいと話す管理者の胸中にはかつての祖母の介護が重なっているように見えた。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	**前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）** 入居者への「促し」の声掛けのトーンに配慮したり、共用空間が無機質にならないように「和物」や「花」を配置する工夫をした。「苦情」への対応では「要望」との境界をはずして、入居者全ての言葉・態度について「思い」や「気持ち」を汲み取り、職員会議で検討できるシステムを構築した。 **今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）** 職員全員が各々の視点で自己点検を行なった。ユニットごとにそれらを持ち寄って討議し作成した。
重点項目②	**運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）** 9月がスタートということもあり、準備をしてきた。文書は開設当時に整えたが実質的には進行中である。構成メンバーは区長、町内会会長、民生委員、家族、地域住民に加えて入居者も検討しているところである。12月に第一回目の会議が開催される予定である。
重点項目③	**家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）** 重要事項説明書には窓口、責任者、第三者委員会を明記している。また、玄関への掲示もなされており「苦情報告書」による苦情把握と解決のシステムも出来ている。
重点項目④	**日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）** 運営推進会議のメンバーになったことを機会に町内会長との連携を強めているところである。町内会への加入も決めており、避難訓練時の協力体制づくりの話もあり、この関係が地域住民のホームへの理解と交流に拡がりをみせていきそうなので期待したい。

2. 評価結果（詳細）

（　　部分は重点項目です　）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	1丁目ユニットでは「生活の場を清潔に保ち、趣味や地域、家族との交流を図り、家族のように共に生活する」を、2丁目ユニットでは「本人の意志を尊重して、自分らしく生活できる」ことを理念として掲げ、ユニットごとに独自の理念をつくりあげている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	ユニットごとに全職員が理念について話し合い、作り上げたものだ。職員の思いを訪問者とも共有したいと、理念を大きく書き出して玄関に掲示している。職員の提案で現在見直しを行っているところであり、近く公開される。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会や老人保健施設、福祉センター、自衛隊などが主催する各種催しには積極的に参加している。ボランティアの訪問もあり、入居者に喜ばれている。今後は地域の住民を対象にホームが持つ専門的知識を活かして講座の開催や介護の体験学習を予定している。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	全職員の一人ひとりが全項目について自己評価した。そのため今回の自己評価の内容はホーム全体というよりは職員自身の内面に向けた評価結果となったようだ。このことからも分かるように各職員の「気付き」を重要視していることがうかがえる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームの開設が7月で「重要事項説明書」には運営推進会議の設置を謳っているが稼動してはいなかった。開所以来、準備を重ねており12月に開催の運びとなった。構成員は区長、町内会長、民生委員、地域住民、家族代表を考えている。	○	入居者のために社会との関わりを持ちたいという管理者の想いを具現化するためにも構成員には入居者、行政も参画されたい。また、会議ではホームからの報告に止まらず、出席者からの質問、意見、提言などを広く求めて相互理解できるよう期待したい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	開設から間もないこともあって連携できていないが、連携の機会については模索中である。	○	ホームが持つ専門的技量を活かして地域に還元したいとの考えから、ホームでの体験学習会や講習会を予定しているということである。実施の折には機会を活用して市の担当職員や地域包括支援センターなどの協力を得られることが望ましい。また、市が催す学習会に講師を派遣することなどで連携することもできる。
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	月に1度、職員が手書きで家族への手紙を書いている。内容は入居者の様子や協力医師からのコメント、薬の説明を兼ねた処方箋などと、入居者の最近の写真を添えて郵送している。職員の異動については事業者が発行する「お便り」に掲載している。日々の変化については随時、電話、FAXなどで伝えている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会が発足したところである。会合では職員には言えないようなことも発言できるような環境づくりに配慮したいとしている。また、入居者の無言有言の様態から汲み取った不満、要望などを記載した「苦情報告書」を、会合の席上に提出して意見を貰う考えである。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	組織の構成上、職員の異動は避けられず、結婚、出産などでの退職者も出ている。ダメージを少なくするために、日常のチームケアを強固にして職員と入居者との信頼関係が偏向しないように努めている。		
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	市が主催する研修会への出席を義務付けている。また、グループホーム連絡協議会、日本介護福祉会などが開催する研修には積極的に参加し報告書を提出させている。研修の内容については全員会議の席上で報告し、知識の共有も図っている。内部では「研修委員会」を設置しており、2ヵ月に1回の頻度で、テーマを生活の中から提起し全職員で討議している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	事業者間（グループホーム4ヵ所）での管理者会議が毎月、行なわれている。職員の相互研修も行なわれたことがあり自らの「気付き」に効果があったようだ。なお、今後も相互研修を定期で実施することや他事業所との相互研修も視野に入れることを期待する。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居を希望する本人と家族にホームを見学してもらっているが、家族が早急な入居を希望するために、見学から入居まであまり期間が無い場合がある。ホームについての理解や納得はしてもらっているが、本人が馴染めるかどうかについては思慮していない。	○	ホームで暮らすことになる本人が安心して入居の意志を持つことが重要であるので、まずは本人に職員の顔を知ってもらうことから始められるのが望ましい。お茶程度の短い時間をホームで過ごすことを繰り返し、本人が居場所と感じるまでの段階を踏んで入居に至ることが望まれる。そうすることで入居後の不穏行動も軽減できると期待できる。
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	年末を控えて入居者が一心不乱に〆縄作りに取り組んでいる。軒先には入居者の手による漬物用のダイコンが暖簾状に並んでいる。食事では盛り付けや配膳する入居者の生き生きとした姿が見て取れた。漬物の塩梅や生活の慣わしなどは入居者の知恵が活かされているという。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	居室担当職員のみならず全職員が携わって「個人利用表」を作成し、入居者の様態把握に努めている。センター方式を用いて活用している。自己表現の困難な入居者については日々の暮らしの中で行動や表情を読み取り、汲み取ることを重ねることで、入居者の思い、意向を把握できるよう努めている。		
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	毎月の職員全員会議では、モニタリング、アセスメント、ケアプランについての検討が行なわれる。検討対象は全入居者である。会議への出席は無いが家族の意見や本人の要望なども見直しの要素となっている。また、通院する入居者のかかりつけ医師からアドバイスをもらい反映させている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	毎日の生活の中で状態の変化を見ながら随時の見直しを行なっている。また、各入居者に対する協力医師からのコメントをケアプランに添付して必要に応じた見直しに役立てている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
３．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	協力医療機関への通院は職員が付き添う。併設にデイサービスはあるが現在のところ利用している入居者はいない。要望があれば考慮できる。		
４．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	17名の入居者のうち15名が協力医師を「かかりつけ医」としている。病状、経過、薬の処方、生活上の留意点がホームに渡され、ケアに活かされている。歯科は月に2回の往診があり「往診結果」は家族へ連絡される。内科の協力医師からは緊急時の通報についての基準の指導を貰いマニュアルとしている。その中の「通報を迷う状態なら連絡せよ」との言葉が印象的だった。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	以前、入居者が重度化したさいに本人、家族、職員が共にホームでのケアを望んだが医師、管理者も交えてのカンファレンスにおいて胃ろうの措置が必要とのことから、看護師が不在であることもあり入院を選択した経緯がある。現在のところ医療行為に関しては病院へという方針である。将来的には看護師を配置して看取りを考えたいとのことである。	○	現在のところは終末期に関して対応できない状況であることは理解できるが、入居の時点で重度化した場合にどうしたいのか、ホームとしては何ができるのかなどについて、土壇場でなく予め話し合っておく必要があると思われる。ホームと家族が重度化について共通の認識を持つことで不要な不安を除くことができることもある。
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
１．その人らしい暮らしの支援					
（1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	個人情報を記した文書などは人目につかない所に保管している。トイレ誘導の声掛けは本人だけに聞こえるように耳元でしている。生活の中で入居者の意向に合わせた暮らしぶりが大事と考えている。「自分がされて嫌なことはしない」を基本に据えて、自分を相手に置き換えて考えるよう努めている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴は6時から20時までの時間帯で好きな時に入ることができる。起床の時間も決めておらず、夜更かしした翌日に寝坊をしても起こされることなく休むことができている。入居者のペースに合わせた生活を心掛けている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	通常の食事は栄養士による献立でユニット共通の食事であるが、季節の行事や誕生会、あるいは入居者の要望があったときなどはそれに合わせた献立を皆で考えて調理したり、出前を取ったりすることもできる。散歩がてらに甘味を食べに外出することもある。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	古くから伝わる健康法のひとつである「菖蒲湯」などは入居者から喜ばれる。他には季節物の「ゆず湯」や温泉を真似た入浴剤なども入浴を楽しむバリエーションのひとつになっている。なかには浴室にラジカセを持込んで民謡を唸って楽しむ入居者も珍しくない。入浴を渋るときの対処は入居者ごとにその気にさせる方法を職員は知っており難しいことではなさそうだ。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	新聞を購読することや隔週で図書館に本を借りに出掛ける入居者もいる。花壇の花を育てたり、畑仕事を楽しむことも日常化している。皆で堪能した収穫物はトマト、胡瓜、蕪、大根、紫蘇、枝豆、ほうれん草であった。手芸、書道にいそしむ姿も見られた。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	今年の年間計画による遠出の外出は松島、定義山であった。ドライブや散歩には、天候や体調をみながら随時出かけている。不穏時には職員と入居者の2人連れで心ゆくまで散歩するのが効果的だそうだ。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	職員は身体拘束について理解しており、その観点から施錠を行なわない。不審者の侵入については夜間施錠を行い日中は注意を怠らないように気をつけている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	前月に避難訓練を行なったところである。夜間想定での実施であった。訓練の際はこれまで無かったマニュアルと役割分担表を作成し訓練に役立てた。訓練終了後の入居者の様子や近隣との協力関係の重要性を考え直す良い機会となり、職員の意識向上へ繋がった。と同時に、町内会と合同で救命講習会を開くことにまで発展した。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は普通食から療養食まで栄養士が行なっている。体重の測定は月に2回行ない、急激な数字の変動は医師に報告して指示を仰いでいる。食事、水分の摂取量はチェック表に記録して把握している。このチェック表は医師に見せて助言の有無を確認してもらっている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	時計、表札、カレンダーの置き位置は入居者の目の高さに合わせて見易く工夫している。居間兼食堂は西側（1丁目）に大きな透明ガラスが配置してあり、曇りの日でも自然光が優しく差し込む。夏はレースと暖簾を用いて陽を遮るよう工夫している。同空間の傍らには6畳程度の畳敷きのスペースがあり家庭の茶の間を想わせる様相で、つい腰を下ろしたくなった。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各室の入口に配した暖簾は防炎加工が施してある。室内には使い慣れた箪笥や家具、テレビ、置物などが個性豊かに配置されている。どの部屋も家族との集合写真が箪笥の上や壁を飾っていた。入居者の歴史を感じさせる持ち物は家庭の居間を連想させる落ち着きがあった。		